



今月の予定

聖歌練習

名古屋:9月11日代式後

- ・初心者の方、自信のない方のための基礎練習
- ・主日聖体礼儀後、ワンポイントレッスンを行います。
- ・毎主日朝、発声練習をしています。ご参加よろしく。

半田:9月21日生神女誕生祭聖体礼儀後

名古屋指揮当番

4日ピーメン松島 18日マリア松島 28日エレナ広石

ズナメニイ研究会

9月27日(金)十字架挙栄祭聖体礼儀後。

グレゴリオチャントが西洋宗教音楽の原点であるように、ズナメニイはロシア聖歌の原点です。ズナメニイを知ることによってビザンティンとの連続性をとらえ、合唱音楽へと発展したロシア聖歌の底にある正教会聖歌の本質をさぐります。また日本語でズナメニイを歌ってみて、古聖歌の魅力を体感してみます。

<http://www.orthodox-jp.com/liturgy/Znameniy/chant.htm>

知って祈ろう - 奉神礼・聖歌入門

聖なる神—もともとは行進の歌

「聖なる神」にはこんな言い伝えがあります。5世紀初めテオドシウス二世の治世のとき、コンスタンティノーブルは大地震に襲われました。いつまでも余震が治まらず、皇帝と総主教プロクルは街の人々とともに外でリティアを行い、何度も「主憐れめよ」を祈りました。すると一人の少年が宙に上げられ、天使たちが「聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我らを憐れめよ」と歌っているのを聞きました。少年は地上に降りると、人々にこの歌を教え、みなで歌うと地震が治まりました。このできごとは9月25日に記憶されます。

結句が「我らを憐れめよ」となっていることから、この歌は痛悔の行進のときに歌われたと考えられています。昔の人々は、災害や敵の襲来があると、神が悔い改めを促していると考え、この歌を歌って神の赦し

を乞いました。「聖なる神」は最も古い聖歌のひとつで、誰もが知っていて、誰でも歌える歌でした。

アンティフォンと同じように、聖詠の句に挟みながら、「聖なる神・・・」をリフレインとして歌い、街の人々も唱和しました。今でも、主教祈禱では「神や、天より臨み観て、斯の葡萄園に降り・・・」という句がありますが、この歌が聖詠の句と交互に歌われていたことの名残です。

「聖なる神」は「ハリストスによって洗を受けし者」に代わることがあります。むかしは復活祭や五旬祭など特別の日だけに洗礼が行われていました。洗礼は別棟の洗礼聖堂で行われ、新しい光照者が主教に率いられ、この歌とともに大聖堂に入室し、聖体機密にあずかりました。

ローマ・カトリック教会では聖大金曜日にも、「聖なる神」を歌います。

(参考文献：D. コノモス『ビザンティン・チャント』)



ホームページのご案内

○「なごや聖歌だより」のホームページ

<http://www.orthodox-jp.com/music>

なごや聖歌だよりのホームページの表紙で名古屋教会の聖歌が聞けます。

○ 東方正教会の聖歌 <http://www.orthodox-jp.com/maria>

詳しく学びたい方のため正教会聖歌の特徴、聖歌の神学、歴史、など海外の資料も多数翻訳して掲載しています。

○ 正教会奉神礼研究 *Liturgia*

ガードナーの『ロシア正教会の聖歌』は世界中で広く読まれている正教会聖歌の入門書です。ここでは現代日本の状況に合わせて適宜省略、解説を加えてご紹介しています。表はカリストス主教のFestal Menayonを参考にしました。

早課 3. 特別な早課 聖大土曜日

次にご紹介する「特別な早課」は聖大土曜日（実際は受難週金曜日の夜に行われる）の早課です。大斎の平日、受難週木曜日まで、聖大金曜日早課と比べると、祝祭性が高まっていることがわかります。たとえば「アリルイヤ」でなく「主は神なり」が歌われること、「凡そ呼吸ある者」と讃揚のスティヒラが歌われること、大詠頌が読みではなく歌われることなどがあります。

聖大土曜日早課の大きな特徴はネポロチニ「道に玷なき者」で始まる118聖詠と讃美詞（ポフヴァラ）です。ネポロチニとは「道に玷なき者」のスラブ語の冒頭のことばです。聖詠の一句ごとに「讃美詞」と呼ばれる主の十字架を讃える歌を挟み込んで歌います。118聖詠は3つの段（スタチア）に区分され、間に小連祷が入ります。118聖詠は土曜日など死者を記憶する礼拝では必ず読まれる聖詠ですが、日本では通常省略され、埋葬式にも冒頭の2句と最後の「光栄は」のみが歌われています。

もうひとつの特徴は大詠頌と聖三の歌の後、就寝聖像を捧げて行方十字行です。この日はまだ「凱旋」ではないので、凱旋旗は用いません。ギリシアなどでは就寝聖像を御輿のように飾ります。十字行から戻ると、預言書、書札、福音経が読まれ、主の復活を待つ気持ちが次第に高まってゆきます。

参照: 日本語訳「ティピコン略」 <http://www.orthodox-jp.com/liturgy/Typicon/typ23-6Holy%20W.html>

受難週の各日に聖書のテーマをあてはめて祈るようになったのは、エルサレムの教会の習慣だと言われます。エルサレムでは主の受難にちなんだ場所を実際に訪ねて祈禱を行いました。ローマ・カトリックの「十字架の道行き」も同じ起源と思われる。

聖大土曜日の早課

始まりの祝福と祝文、第19聖詠、20聖詠誦読、十字架のトロパリとコンダク

「主憐めよ」3回の短い連祷

六段の聖詠（第3、37、62、87、102、142聖詠）

大連祷

トロパリ

聖詠経の第17カフィズマ、即ち第118聖詠を3段（スタチア）に分けて行う。

聖詠の各句には讃美詞（megalinavrion; по х в а л а）とよばれる特別の歌が続き、葬られたハリストスを讃美する。聖詠の句は詠隊が歌うが、讃美詞は司祭が聖堂中央で唱える。第1第2スタチアはともに5調だが、メロディの構造が異なる。第3段は3調で歌われ、一挙に祭的なムードになる。第1、第2段の間に小連祷がある。第3段のあと5つの復活トロパリ（主日早課5参照）が歌われ、小連祷が続く。

カノン（第9歌頌の前の「我が心は主を崇め」 magnificatは歌わない）

光耀歌の代わりに「主は神なり」

「凡そ呼吸ある者」聖詠、讃揚のスティヒラ

大詠頌。終わりの聖三の歌が近づくと、就寝聖像（ejpitavfion; плащаниця）を捧げて聖堂を出て十字行を行う。その間、聖三の歌を長いゆっくりしたメロディで歌う。

聖堂に戻り、聖大土曜日のトロパリを歌う。

ポロキメンとイエゼキリの預言書（エゼキエル）37章の読み

第2のポロキメンと書札の読み

アリルイヤと句（聖体礼儀と同様）

福音経の読み

連祷と終わり、主日早課と同じ

